

児玉和夫、武藤安子、江木明美(心身障害児総合医療療育センター)

I. はじめに

発達途上特にその初期に障害をもった子供達における母子関係の考察は、療育実践上大きな意義がある。本研究ではわれわれの療育実践の過程で得た貴重な体験を分析してきたが、最終年度では今後の障害乳幼児療育方針としても提起していきたい。

研究は当センター(心身障害児総合医療療育センター)の外来通園部と母子入園部の2つの部門での検討をまとめたものである。

II. 母子通園による母子相互作用の発達治療的意義

1. 序

心身に障害をもつ乳幼児の発達の初期によくみられる母親を含む人への関心の低さ、人とのコミュニケーション行動の未発達について、それが障害の重さを現す発達像として把握されることが多い。しかし、出生来、乳児の側の何らかの生得的な基礎が母親の養育行動に影響を与え、発達の機能たりうる母子間の相互作用の基礎が十分に育っていないことに起因すると思われるケースが少なくない。

そこで、本研究では次の点について考察し障害児療育に役立てていきたい。

- ①障害児における母子相互関係の形成・発展過程。
- ②母子相互関係の発達治療的意義。
- ③母子通園における発達援助の方法。

2. 研究対象および方法

当センター通園科に母子通園する主として0才～6才の乳幼児とその母親を対象とする。方法は、相談面接、集団指導などの場面における臨床的観察法である。

3. 研究成果および考察

①障害児における母子相互関係の形成・発展過程

母子相互関係の発達の指標、時期については個人差が指標されているが、一般にいわれている次のようなステップを参考にす。すなわち、第一段階は、乳児が社会的対象と非社会的対象を識別し、“ひと一般”の顔や声に対する知覚の優先が認められること。第二段階は、母親へのプリファレンスや特定の期待を持つ信頼感が認められること。第三段階は、いわゆる“分離不安”や“人みしり”が認められること。

障害をもつ乳幼児の母子相互関係の発達関係について次の二つの傾向について考察する。

a. 各発達段階の指標の発現の時期については、一般に比して遅れるケースは多い。但し当園通園科に過去5年間に在籍し、療育を受けてきた約150名の乳幼児の発達経過を追跡したところ、障害の種類、重さにかかわらず、ほとんどの子供が3才～3才半頃までに、場合によっては5、6才までかかるが、母親を選択しポジティブな感情を現す段階には達している。例えば、障害の重い子Aの母子関係の経過をみると、3才半頃；“人と視線をあわさない”“抱かれていて降ろされると泣く” 5才頃；“母親が他の人と話すと文句を言うように声を出す”“厭なことがあると母の方を見る” 6才頃；“母が外出の支度をするとベソをかく”のように、母子関係の発現の時期は遅れながらも良好な経過をたどっている。

b. 一般の発達過程においても、様々な要因が母子関係に影響を与えるが、療育の経過で“再刻印づけ”のような過程を経て各発達段階が強固になるというケースも多く見られる。例えば、4才の重い脳性麻痺をもつ子供Bは、すでに良好な

母子関係を経て母子分離の集団保育を楽しめるようになっていた頃に妹が誕生した。Bは母親と赤ん坊の相互交渉を見ていて、自分が世話を受ける時に同様な様式を態度で要求した。母親は妹の時はBの場合とは比較にならないほど「あやし行動」が動的であるのに気付き、Bにも同様にするように心がけた結果、Bの人への関心、意志表出の強さが以前より著しく活発になった。療育の意義は、このような過程を積極的に援助することであるとともに、好ましい母子相互関係を育てることが障害を持つ子供の乳幼児期の発達における基本的な課題であると言える。

②母子相互関係の発達治療的意義

障害をもつ子供の発達援助という観点からみると、母子相互関係にいわば治療的方法としての意義を見出すことができる。どのような意義を持つかについてここでは考察する。

まず、乳幼児がとりむすぶ諸関係(対人関係、対物関係、対自己関係)における対人関係としての母子相互関係の特異性は何かについて検討する。

ブラゼルトンは、乳児の対人および対物への注視のパターンの異なる結果に注目した。乳児の応答的経験からいえば、人との関係においては様々な複合的サインを交わしながら変化に富んだ相互交渉を行うが、物との関係においては、物の固有の性質や法則に即応して、更に、自己との関係においては応答的効果がよりダイレクトに感覚に確かめられるかたちで相互交渉を行う。この三者の経験の違いがあることにおいて、人との関係の特殊性が明らかになる。障害をもつ子供の示すいわゆる問題行動には、各々の関係における応答的経験の行き違い、乏しさを様々な形で表している場合が少なくない。治療的仮説として、例えば“固執”などのように物との応答的効果を確認している子供、“自己刺激”などの子供に、人との関係の基盤を育て、複雑で変化に富む人とコミュニケーションする方法を再学習するという意味で母子相互関係の視点が重視される。もちろん母その人が絶対視されるという

意味ではないが、療育に参加する母親あるいは両親の役割に、以前より発達治療的な機能が求められていることは事実である。

③母子通園における発達援助の方法

治療発達の意味での母子相互関係の発達援助の方法について次の3つの方向を検討する。

a. 子供の知覚・認知機能の開発

母子相互関係の発達には、子供の側の知覚・認知機能が関与しているといわれている。子供は様々な感覚経路を介した相互交渉を経て母親を知覚するようになり、そして、学習した系列の予測によって母親に特定の期待を示すようになる。それが母親についての初歩的な表象へとつながると考えられている。一般には無意識に行なわれている母子間の相互交渉も、障害をもつ子と母親の間では意識的になされることも必要である。諸感覚の経路を開発する知覚・運動体験、相互交渉のレパトリーが組み込まれた様々な遊びの体験などがなされるように療育のプログラムが段階的に用意されることが必要である。

b. 母親への援助

子供の養育基盤全体に目を向けなければならないが、母親への精神的、身体的サポートの配慮は欠かせない。当初の困難を乗り切る時期を除けば、グループのプログラムの発展的援助が有効のようである。

c. 発展的な母子相互関係の育成

母子通園の意義は、良好な母子関係の形成・発展を援助するとともに、様々な経験を経て子供の母親からの自立の達成を助けることにもある。各々の母子相互関係の変化を見通して段階的な療育体系を設定していくことが必要である

Ⅲ. 母子入園における母子相互作用の発達治療的意義

1. 序

Bowlby, J. (1958, 1969)によって初めて導入されたアタッチメントの概念は、母と子の関係を発達治療的に把える際に有用な視点を与えてく

れる。この概念は、比較行動学の観点を踏まえたものであり、Harlow, H. F. (1958, 1979)のcontact comfortと共に、児にとっての「母なるもの」の意味を考える上で大きな示唆を与えてくれる。

2. 対象児

T. H. (♂ 1才6か月)脳性巨人症、二分脊椎、第三子(姉妹三人の末っ子)、顔貌には一見して疾患特有の特異さがあった。

3. 方法

心理個別指導(週1回)、母親グループワーク(母親へのカウンセリング的アプローチ)、日誌(週末に提出される)、外泊日誌(週末外泊時の記録)等の記述。保育場面、食事場面、日常場面での臨床観察などによる。

4. 経過

入園初日 大声で泣きながら床の上を転がり、母の後を追う。家ではこのように激しく母を求めることはまったくなく、又、姉(4才と3才)の遊びにも加わらなかったという。玩具で遊ぶこともなく、全体に無気力ともおとなしいともとれる状態であったという。

母子入園により見慣れない(unfamiliar)人々ばかりの知らない場所に来て、不安感が高まり急に母を求める行動が激しく出現した。

2週目に体調を崩したことをきっかけに母への甘えが見られるようになった。母のひざに坐って玩具の車の荷台にすこしずつ触れはじめた。

4週間ぶりに帰宅すると同居の祖母にも決して抱かれず、母のみにべったり抱かれていた。姉(4才と3才)達も近寄らず本児からも近寄らなかったという。

5週目 母と身体接触をしていない姿勢の時を把えて遊びに導入することを試みた。徐々に玩具への手伸ばしが始まり、小さな木球を把握するようになった。本のページをあけて「正面向き」の絵を見て喜ぶようになった。対人的な不安は、ほぼ解消した。小さいものをつまみあげて、いたずらをするようになった。

6週目 親戚に外泊。初めての人にも抱かれ、なにか人に話をするような声を発するようになった。

てきた。男の人にも抱かれるようになった。

7週目 引き出しを開けたり出したり。カクレンゴをして顔を合わせると喜ぶ。恐がらない。母から離れて探索し、しばらくして母の膝にもどって休憩している。

8週目 ヒモ付き玩具をたぐり寄せる。他児と向かい合って玩具をいじったり微笑したりしている。母は子供のささやかな小さい仕種もよくみて喜ぶようになった。母は児の適応がよくなるにつれて、入園前の様子や、これからの療育について自発的に話すようになった。母親グループワークでは、8週目に入って、「顔が他とは違う」と思って、外へ連れて出ることが出来なかった。帰ったらできるかどうかかわからないけれど連れて出ようになりたい。この子のためになることがわかったから。」と述べた。本児の家庭は祖父母、父母、姉2人の家庭であり、対人的には開かれた家庭を想像されるが本児は一人で過ごすことが多く、外とのつながりはこれからの課題である。

9週目 玩具の操作を好むようになった。スライド式のフタをあけたり、積み木や木球を取り出したり積極的にいじる。同室の仲間(peer, ♂ 1才0か月)といることを好み、二人でよく笑いあっている。

5. 考察

① 母とのアタッチメントの形成には、見慣れないひと(stranger)や、なじみない状況(unfamiliar)に遭遇することによる緊張と不安が、効果的な誘因となると推察する。真に母を必要とする適度の心理的危機感や緊張感の体験が必要であると考え。

② 特に本児のような特異な顔貌や、奇形のケースでは、母に対して、児の受容と共に地域とのかかわりの中で育てる自信を持たせるための心理的援助をすることが必要であると考え。

③ 児の行動域の拡大や、探索欲求の高まり、玩具の保持、操作等は、母を安全基地(secure base)とする心理的保証が得られた時に成立した。

④ 母子入園というシステムは、心理的側面か

らみると、

- a. アタッチメント形成を阻害した刺激の乏しい状態に、適切な刺激を与えたこと。
 - b. 母と子が密に過ごす時間を持ちえたこと。
 - c. 外にでること、すなわち開かれた関係の中で育てることの大切さを知ったこと。
 - d. 障害を持つ児の母親達どうしで話し合う。機会(母親グループワーク)が持てたこと。
 - e. 児にとって、仲間の中に共に在ることが、如何に活気をもたらすものかを知りえたこと、等であろう。
6. 結び

児の発達の過程の中で、障害そのものよりも、障害によって二次的にもたらされるものが心理的に大きく影響を及ぼしていると推察した。

乳幼児期より、地域的な同年令集団の中で共に育てる意欲を持たせる出発点として、母子入園は一つのユニークな方法であると思う。

IV. まとめ

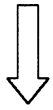
以上当センターの二部門からの実践経験を基礎にした分析と提起を行ったが、母子相互関係の分析と方針検討が、これらの子供達の療育に如何に大事かを、わかっていただけであれば幸いである。

文献

1. 武藤安子：母子関係を育てる
松村康平 監修、こころの育児学
講談社 1984
2. Bowlby, :Attachment(1969,1982) Tavistock.
3. 江木明美：母になること—重度重複障害乳幼児の母子入園によるアプローチ。
日心論文集 1984
4. Harlow, H.F. and Mears, C
The Human Model.: primitive perception,
Winston and Sons, 1979



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに

発達途上特にその初期に障害をもった子供達における母子関係の考察は、療育実践上大きな意義がある。本研究ではわれわれの療育実践の過程で得た貴重な体験を分析してきたが、最終年度では今後の障害乳幼児療育方針としても提起していきたい。

研究は当センター(心身障害児総合医療療育センター)の外来通園部と母子入園部の2つの部門での検討をまとめたものである。